

■ 解答・解説

問1 答え：手持ちぶさただ・することがなくて退屈だ。

〔解説〕「つれづれなり」は「することがなく退屈だ・もの寂しい」という意味の形容動詞です。「日もいと長きに、つれづれなれば」で「日も長く、することもなく退屈なので」となり、源氏が垣間見に出かける理由になっています。

問2 答え：(1)ラ行下二段活用「紛る」の連用形。(2)（夕暮れの霞に）紛れて（＝人目につかないよう、霞にまぎれるようにして）。

〔解説〕「紛る」は「入りまじって区別がつかなくなる・まぎれこむ」意のラ行下二段動詞。ここは光源氏が夕暮れの濃い霞にまぎれ、人目を避けるように小柴垣のそばへ歩み出た場面。「まぎれ」は連用形で、下に接続助詞「て」が付いています。

問3 答え：(1)尊敬語。(2)作者（語り手）から、立ち出でる動作の主である光源氏への敬意。

〔解説〕「給ふ」は四段活用で、動作をする人を高める尊敬の補助動詞です。北山の小柴垣のもとに歩み出るのは光源氏なので、語り手から源氏への敬意を表します。地の文の敬語は「語り手（作者）から」と考えるのが基本です。

問4 答え：光源氏。

〔解説〕「立ち出で給ふ」「のぞき給へば」は、いずれも尊敬の「給ふ」が付いており、北山で小柴垣のもとに歩み出て、惟光とともに中をのぞいているのは光源氏です。主語が省略されていても、敬語（給ふ）や文脈から動作主を判断します。

問5 答え：「たいへん色白で上品にやせているけれど。」

〔解説〕「いと」は「たいへん・とても」。「白う」は「白く」のウ音便で色白なこと。「あてなり」は「上品だ・高貴だ」という意味の形容動詞で、ここでは尼君の品のよさを表します。「瘦せたれど」は「やせているけれど」。

問6 答え：②「うつくしげに」＝かわいらしい様子で／⑤「幼や」＝幼い、子どもっぽい（ことよ）。

〔解説〕古文の「うつくし」は、今の「美しい」ではなく「かわいい・いとしい」という意味が中心です（小さいものへの愛情）。「うつくしげなり」はその様子を表し「かわいらしい様子だ」。「あな幼や」の「あな」は「ああ」という感動の語、「幼や」は「幼い・子どもっぽいことよ」。尼君があきれて言っています。

問7 答え：現代風だ・今風で華やかだ・しゃれている。

〔解説〕「今めかし」は「現代風だ・今風で華やかだ」という意味の形容詞です。尼君の短く切りそろえた髪が、かえって長い髪よりも「こよなう今めかし（この上なく今風で華やかだ）」と源氏が感じている場面です。

問8 答え：しみじみと心がひかれる様子で・しみじみと（趣深く）。

〔解説〕「あはれなり」は「しみじみと心が動かされる・しみじみと趣がある」という意味。ここでは源氏が尼君の様子を「あはれに（しみじみと心ひかれて）見ている」ことを表します。「うつくし（かわいい）」とともに源氏物語頻出の心情語です。

問9 答え：断定の助動詞「なり」の連体形「なる」＋推定（婉曲）の助動詞「めり」が結びついた「なるめり」が、「なんめり」をへて「なめり」となったもの。

〔解説〕「子なめり」は「(尼君の) 子であるようだ」の意味。「なり（断定）」の連体形「なる」に「めり（推定・～ようだ）」が付くと「なるめり」→撥音便「なんめり」→「ん」が表記されず「なめり」となります。古文特有の音の変化で頻出です。

問10 答え：「雀の子を、犬君（という召し使いの子）が逃がしてしまったの。」

〔解説〕「雀の子」は飼っていた小さな雀。「犬君」は少女に仕える女の子の名前（人名）です。「逃がしつる」は「逃がしてしまった」。少女が、かわいがっていた雀を逃がされて、がっかりしている場面です。

問11 答え：完了の助動詞「つ」の連体形。終止形は「つ」。

〔解説〕「つ」は「～てしまった・～た」という完了を表す助動詞です。あとに「を」という助詞が続いて、文がまだ続いていく形（連体修飾・準体法）なので、終止形「つ」ではなく連体形「つる」になっています。「ぬ」とともに完了の助動詞の代表としてよく問われます。

問12 答え：完了（存続）の助動詞「たり」の連体形。

〔解説〕「籠めたりつる」は「(伏籠の中に) 閉じこめておいた」の意味。「たり」は「～ている・～である（存続）」「～た（完了）」を表す助動詞で、ここは「閉じこめておいた（その雀を）」という存続・完了の意味です。あとに体言を受ける「つる」が続くため連体形になっています。

問13 答え：残念だ・くやしい。

〔解説〕「口惜し」は「残念だ・くやしい・もの足りない」という意味。かわいがっていた雀を犬君に逃がされてしまい、少女が「いと口惜し（とても残念だ）」と思っている場面です。

問14 答え：かわいがって伏籠の中に入れて飼っていた雀の子を、犬君が逃がしてしまったから。

〔解説〕少女は「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠のうちに籠めたりつるものを」と言っており、大事に閉じこめて飼っていた雀を逃がされてしまったことを「いと口惜し（とても残念だ）」と思っています。顔が赤いのは、泣いて訴えていたためです。

問15 答え：尼君が、（雀を逃がされて泣いている）少女（のちの紫の上）に対して言ったことば。

〔解説〕直前で少女が「雀の子を犬君が逃がしつる…」と残念がっており、それを受けて尼君が「いで、あな幼や（まあ、なんて子どもっぽいこと）」とたしなめています。尼君は自分の命が長くないことを気にかけており、雀のことばかり気にする少女を心配しているのです。

問16 答え：「ふがいなく（しっかりしないで）いらっしやることよ。」

〔解説〕「言ふかひなし」は「言ってもしかたがない・ふがない・たわいない」。「ものし給ふ」の「ものす」は「ある・いる・する」などの代わりに使う言葉で、ここでは「(そのように) していらっしやる」。「かな」は詠嘆。雀のことばかり気にする少女を、尼君があきれてたしなめています。

問17 答え：「成長していくだろう様子を見たい人だなあ。」

〔解説〕「ねびゆく」は「成長していく・大人びていく」。「ゆかし」は「見たい・知りたい・心がひかれる」という意味の形容詞です。「む」は推量。源氏が、この子が大人になったらどうなるか見てみたい、と感じている気持ちを表します。

問18 答え：「ねびゆく」＝成長していく・大人びていく。「ゆかし」＝見たい・知りたい・心がひかれる。

〔解説〕どちらも頻出の重要語です。「ねびゆく」は年齢を重ねて大人になっていくこと。「ゆかし」は対象

に心が引かれて「見たい・聞きたい・知りたい」と思う気持ちを表す形容詞で、現代語の「ゆかしい（奥ゆかしい）」とは意味がずれるので注意します。

問19 答え：「(源氏が) この上なく深く思いを寄せ申し上げている人(藤壺)に、たいへんよく似申し上げているのが(理由で、目がとまるのだった)。」

〔解説〕「限りなう」は「この上なく」。「心を尽くす」は「深く思いをこめる・恋い慕う」。「きこゆ」「たてまつる」はどちらも謙譲の補助動詞で、現代語訳では「～申し上げる」とします。「いとよう」は「たいへんよく」。少女が藤壺によく似ている、という意味です。

問20 答え：「きこゆる」＝謙譲語で、(源氏が) 思いを寄せる相手(藤壺)への敬意。「似たてまつれる」＝謙譲語で、(似ている対象である) 藤壺への敬意。

〔解説〕「きこゆ」は「言ふ」の謙譲語としても使いますが、ここでは補助動詞的に「心を尽くしきこゆ」で、動作の向かう相手(思い慕う対象＝藤壺)を高める謙譲語です。「たてまつる」も「似る」に付いた補助動詞で、似ている相手＝藤壺を高める謙譲語。どちらも語り手から藤壺への敬意を表します。

問21 答え：その少女が、源氏が限りなく恋い慕っている人(藤壺〈ふじつぼ〉)に、たいへんよく似ていたから。

〔解説〕傍線部⑦「限りなう心を尽くしきこゆる人」とは、源氏が深く思いを寄せている藤壺を指します。少女の面影が藤壺に似ていたため、源氏は思わずその子から目が離せなくなり(「まもらるるなりけり」、涙までこぼしているのです。「藤壺に似ているから」が答えの核心で、頻出ポイントです。

問22 答え：自発(自然と～される)。

〔解説〕「まもらるるなりけり」は「(自然と) 見つめられるのであった」。「るる」は助動詞「る」の連体形で、ここでは源氏が藤壺に似た少女を思わずじっと見てしまう、という自発の意味です。心情を表す動詞に付く「る・らる」は自発になりやすい、と覚えておきましょう。

問23 答え：(1)謙譲語。(2)作者(語り手)から、持仏(仏)を据える動作の向かう相手である仏(持仏)への敬意。

〔解説〕「奉る」は、動作の向かう相手を高める謙譲の補助動詞です。「持仏据ゑ奉りて」は「持仏をお据え申し上げて」で、据える対象である仏を敬っています。尊敬語の「給ふ」(動作主を高める)との違いに注意しましょう。

問24 【文学史】 答え：(1)作者＝紫式部(むらさきしきぶ)／(2)成立した時代＝平安時代(11世紀初め・中期)／(3)ジャンル＝作り物語(つくりものがたり)(長編の物語文学)。

〔解説〕『源氏物語』は平安時代中期に紫式部が書いた、五十四帖からなる長編の作り物語です。光源氏を主人公とし、王朝の恋愛や人生を描きます。作者・時代・ジャンルの3点セットはテストで頻出なので必ず覚えましょう。

問25 【文学史】 答え：主人公＝光源氏(ひかるげんじ)。歌物語の代表作＝『伊勢物語』(ほかに『大和物語』なども可)。

〔解説〕『源氏物語』の主人公は光源氏。これに対し、和歌を中心に短い話を連ねた物語を歌物語といい、その代表が在原業平を思わせる男を主人公とする『伊勢物語』です。「作り物語(源氏物語・竹取物語など)」と「歌物語(伊勢物語など)」の区別は文学史で頻出です。
